

私の研究の立場から見たグローバリゼーション
価値ある世界の実現へ向けて

上智大学大学院
哲学研究科 哲学専攻 博士前期課程
B0511010 吉田幸司

要約

世界は先行きの見えない闇に包まれている。グローバル化した世界は、国境を越えた地球規模での活動や技術の発展といった明るい一面の裏に、環境問題や感染症問題、移民・難民問題といった様々なグローバル・イシューをかかえている。こうした世界的問題を深刻に受けとめた昨今、人類は「地球規模で」という旗を掲げ、問題への対応策を模索し始めた。しかし本稿において私は、その個々の研究や諸問題への具体的対応策を主題化するのではなく、グローバリゼーションおよびその種々の研究の影に隠れている根源的問題を明るみに出し、哲学的次元で考究する。すなわち、価値という観点から光を当て、価値ある世界とはいかなる世界であるのか、私たちが目指すべきよりよい世界とはいかなる世界か、と問い、グローバリゼーションという動向の中、世界、そしてそこに住まう私たちはどこへ向かうべきなのかを考察する。その際、私は哲学者 A. N. ホワイトヘッドの「有機体の哲学」を手引きにした。彼は、テイヤール・ド・シャルダンと同様、宇宙を一つの有機体とみなし、全宇宙が律動的に前進していく過程で真や美といった価値が実現されていくと考えた。本稿では、こうした哲学的宇宙論を地盤にして、価値ある世界を特徴付けた後、グローバル化する世界が、国や地域、文化、民族等の多様性を認めつつ、国家の壁を越えた地球規模的な全体のヴィジョンを、地域に根ざして具現していかなければならないということを明らかにする。そして、そのような価値ある世界を実現するためには「真的美」という価値への繊細さが必要とされることを指摘するとともに、本論者が、よりよい世界へと旗を導く光になることを目指したい。

1. はじめに

世界はどこへ向かうのか。かつては地域社会や国家単位の問題であった環境問題や人間同士の争いも、交通・通信技術の発達に伴って、現代では人類全体に影響を与えるほど地球規模化している。前世紀には二度の世界大戦が勃発し、今世紀に入ってから、記憶に新しい世界貿易センターやペンタゴンの悲劇以来、世界的にテロ行為が多発している。食糧問題や感染症問題、移民・難民問題、さらには、地球に生息する全ての生き物を巻きこむ環境問題など、多くのグローバル・ 이슈が、今日、切迫したものとなっている。しかし、危機に面した私たちは、今、こうした諸問題を国家の枠組みを越えて地球規模で解決していかなければならないと自覚しつつある。「地球規模で」というスローガンを掲げた世界、そしてそこに住まう私たちはどこへ向かうべきなのであろうか。

2. グローバリゼーションに潜む根源的問題 価値とグローバリゼーション

「グローバリゼーション」という用語は、政治や経済、文化など様々な分野で使われている。本稿ではその意味を精確に規定することはしないが、次のことについてまず注意を喚起したい。すなわち、グローバリゼーションはそれ自体が無条件に価値あることと認められるわけではないということである。私はこのように指摘することによって、グローバル化という現象そのものがグローバル・ 이슈の原因にもなっているということを示唆しているだけではなく、グローバル・ 이슈に対処しようとする種々の研究さえも必ずしも無条件によいといわれるわけではないということも示唆している。グローバリゼーション研究の中心となっているのは、グローバル化という現象下における事実の分析や、グローバル・ 이슈に対する具体的対応策であろうが、これらについて論じることは、本稿で私が意図することではない。私の研究の立場からグローバリゼーションについて提言すべきことは、それらの研究に否応なしに通底している問題を顕在化させ、哲学的次元で究明することである。

私は、上智大学理工学部物理学科を卒業した後、現在、哲学研究科において、「価値¹」をめぐる問題を研究している。物理学をはじめとする近代科学は次の点で世界から価値を分離してきたとすることができる。第一に、近代の科学的唯物論に基づく自然観は、自然内から目的や価値を追放した。つまり、自然は目的や価値をもたずに機械のように動く「死せる自然」と捉えられてきたのである。第二に、「自然支配」によって特徴付けられる近代科学あるいは近代技術は、その使い道を方向付ける価値から引き離され、人間の実践的な営みとは別の位相で考えられてきた。科学・技術の発展そのものが目的とされ、その活用法や価値の選択については別の問題として取り扱われてきたのである。

¹ 言うまでもなく、ここで述べられている「価値」とは、単なる有用性や経済的な価値ではなく、真、善、美といった価値のことである。

第一の点については次章で触れるとして、本章では第二の点について言及しておきたい。上のような見方に反して、科学や技術は常に、真偽や善悪、美醜といった諸価値、そして私たちの実践的活動と深く結びついている。例えば、平和を愛したアインシュタインが発見した $E=mc^2$ という美しい式は、皮肉にも原子爆弾へと応用され、広島・長崎での悲劇をもたらした。核に関する知は、原子力発電という平和利用だけでなく、悪を現実化する原子爆弾にも応用されてきたのである。また、私たちの生活を快適にしたフロンガスは、大気中のオゾン層を破壊し、現代におけるグローバル・イシューの原因となった。類似した事例は無数にあるが、それらに共通していえることは、価値の選択に対する繊細さを失うことによって、思いも寄らない悲惨な結果を招いているということである。実現すべき価値に対する繊細さを欠くとき、よりよい世界を目指して切磋琢磨する科学者や技術者の意図に反して、悪が実現されうるのである。

さて、以上のことはグローバリゼーションについても当てはまる。すなわち、グローバル・イシューへの対処やグローバル・スタディーズも、上の例と同様、常に「価値」に関与しており、それらは善にも向かいうるが、悪にも向かいうる。問題を解決するはずだったのに実際には悪を実現してしまう危険性、価値の低い世界を実現してしまう危険性がグローバリゼーションにも伴っているのである。

例えば、グローバリゼーションという流れに翻弄される危険性、あるいは故意にそれを利用する危険性がある。紛争問題や民族問題を解決するという大義名分によって（それが自覚的であろうと無自覚的であろうと）少数民族が制圧される結果となったり、あるいはまた、それぞれの国や地域がもつ文化の多様性や個別性が排除されてしまったりするかもしれない。どこの国の人間も同じ音楽を聴き、同じ映画を見、同じものを食べ、同じ服装を身につける。実際、日本固有の文化は既にグローバル化の波に揉まれて薄れてしまったようにも思われる。ここには、価値の一元化という危険性や、支配的な全体へ個を従属させる危険性が潜在している。諸国家を全体に従属させるのがグローバリゼーションであるならば、それは地球規模の悪しき全体主義に過ぎなくなってしまう。

また、環境問題のような世界的問題については、「地球規模で」というスローガンを掲げて前進したものの、地球に暮らす人類一家が奈落の底へ転落するという事も考えられる。極端な例として、オゾン層を回復させるためにオゾン発生装置を作った人類が、空気より重い有害なオゾンによって絶滅するという物語を考えてみる。人類はそこまで愚かではないように思われるが、原子爆弾やダイナマイトの発明、フロンガスの使用は、このような物語に現実味を与える。ましてやグローバリゼーションという動向においては、結果が地球規模にまで及んでしまう。グローバルな視点に立てば、原爆による被害が広島と長崎だけでよかったと逆説的に主張できてしまうのである。

もちろんグローバル化は価値の一元化・全体主義への傾斜ではないと理解されているし、研究者は誰も「よりよい世界」を実現すべく尽力していることであろう。だが、グローバリゼーションは、一歩間違えれば、価値の一元化・全体主義に移り行くかもしれないし、

非常な悪を実現してしまうかもしれない。それ故、私たちはグローバリゼーションという動向の中で、自分たちは何を狙っているのか、実現すべき価値ある世界とはいかなる世界なのかを常に気にかけていなければならない。目指すべき世界、価値ある世界とはいかなる世界であるかを根拠づけなければ、私たちはグローバル化の過程の中を盲目的に歩んでいることになってしまう。グローバリゼーションは価値の一元化や全体主義ではないというなら、それはいかなる意味においてそうなのか。そして、私たちがグローバリゼーション研究によって狙っている世界とはいかなる世界なのか。自分たちが目指すべき世界を見失ったまま、目の前に差し迫った問題に翻弄されるとき、グローバリゼーションおよびその研究は、コスミックな観点から眺めれば、風任せの漂流にほかならない。国境のない大海原を旅する宇宙船地球号は、目的地へ向かうための舵を必要とする。

価値をめぐる基礎的研究は、グローバリゼーションという現象下における事実の分析や具体的問題の解決策に先んじている。というのも、私たちが実現すべき価値を見極めていないならば、グローバリゼーションに関わる研究は全て無基底のものになってしまうからである。グローバリゼーション研究や具体的問題への対処の後に「グローバリゼーションはどうあるべきか、どこに向かうべきか」を考察するのは本末転倒なのであって、世界における価値を見直し哲学的に基礎付けたときはじめて具体的問題やその解決案を問うことが出来るようになるのである。

したがって、私たちは第一に、グローバリゼーションを通して実現すべき世界とはいかなる世界であるのか、私たちが目指すべきよりよい世界とは何か、を問わなければならない。

3. 「有機体の哲学」から見るグローバリゼーション

本章では、私が価値をめぐる問題を研究する際に拠り所としているホワイトヘッド(A. N. Whitehead, 1861-1947)の哲学を手引きにして(未熟な研究者として誤って解釈するかもしれないが)私たちが目指すべき世界について論じてみたい。

ホワイトヘッドは数学者・物理学者・哲学者として多面的に活躍したが、特に哲学者としての彼は、相対性理論や量子論をも内に含む新しい自然学を基盤にした、世界(ないし宇宙)全体を統合的に説明する哲学的宇宙論、「有機体の哲学」を構築した。ここで「有機体」とは、自然科学者の用法に制限されるものではなく、電子や原子、石や机といった無機物、国家や地球、さらには太陽系や銀河系にも適用されるテクニカルタームである。彼の哲学によれば、人間などの生物だけでなく、素粒子や石といった無機物も有機体なのである。ホワイトヘッドの有機体の哲学は、テイヤール・ド・シャルダンの洞察と類似する点を多く含んでおり、生物のみならず無機物にも精神的な側面があるという。ただし、アニミズムとは異なり、電子や石に意識があるわけではない。意識は、高度に発達した有機体の主体形式と考えられている。電子や石については、精神的な側面が極微であって物的

な側面が支配的であるに過ぎない。そして、程度の差はあるものの、低級な有機体である素粒子から高級な有機体である人間まで全ての事物が、生成し活動する主体なのである。

おそらく、多くの自然科学者がこうした哲学に対して拒絶反応を示すだろう。とりわけ、最小作用の原理（あるいはハミルトニアンやラグランジアン）を駆使して自然現象を記述する物理学者や化学者にとって、電子や原子も一つの主体であるということは受け入れがたいであろう。だが、彼らが無批判に受け入れている自然観こそ、前章で触れた近代の科学的唯物論が前提していた誤った自然観なのである。

私たちが具体的に経験する自然は、ワーズワースやシェリーといったロマン派の詩人たちが詠うような「生きた自然」である。それは有機的に統一された自然であり、そこでは美的な秩序や調和が実現されている。有機体の哲学によれば、自然ないし宇宙において生成し活動するもの(*actual entity*)は全て、相互に関係付けられている。人と人だけでなく、素粒子や細胞、地球、そして遙か彼方の一吹き of 塵のような存在も含めて、あらゆる事象ないし事象が相互に関わりあいながら、秩序や調和を達成している。あらゆる個体が他のすべての存在とともにあるのである。

ただし、先に述べたように、一切の活動するものは他と関係付けられながらも、それぞれ主体として活動している。身体内の各器官、細胞内の細胞小器官、原子内の電子や原子核など、いずれも他と関係しあいながらも、心臓は心臓として、葉緑体は葉緑体として、電子は電子として、機能・運動している。有機体の哲学は、自然がもつ個性と多様性を認めているのである。自然は、個を全体に従属させ、個の価値を發無するようなものではない。身体内の各器官、細胞内の細胞小器官、原子内の電子や原子核、いずれも、全体の中で活動してはいるものの、それぞれ独自の価値をもって活動している。個は「他と共にある個」であると同時に、自由に活動する「主体としての個」である。従って「全体」と言っても個を逸するようなものではなく、個が全体の中に意味付けられ、全体が個において具現されるようなものである。有機体の哲学においては、それぞれの個に固有の価値が認められ、個において全体のヴィジョンが実現されてくるのである。そして、ホワイトヘッドはテイヤール・ド・シャルダンと同様、宇宙を一つの有機体とみなし、全宇宙が律動的に前進していく過程において価値が実現されていくと考える。そのプロセスの結果として、世界は多様な価値に満ち溢れ、美的秩序を達成しているのである²。

以上のようなコスモロジーは人間社会にも同様に当てはまる。それも、自然を人間社会に射影した単なる比喻にとどまるのではない。人間社会そのものが、宇宙における一つの有機体なのであり、有機的統一を実現していく過程なのである。以下では人間社会に焦点を絞って考えてみよう。

上で挙げた諸々の有機体と同様、人間も、社会からの制約を受け、他者との関わり合いの中で生きながらも、同時に主体として生きている。逆に言えば、人間は、一人の主体と

² なお、ホワイトヘッド自身は、秩序の根拠として神に言及する。そして、「神の目的は時間的世界における価値の達成である。」(*RM*, p. 100)

して生きながらも、他者に関わり、影響を与え、そして他者ととも社会を作っていく社会の構成員でもある。同じく、国家や諸地域も、地球という全体の中で内的に関係しあいながら、多様性と個別性を保ちつつ、全体を形作っている。有機体の哲学によれば、価値ある世界とは、多様性や個別性、自由が認められつつ、国や地域が、国家間の枠組みを越えた全体の中に位置づけられるような世界である。つまり、それぞれの国や地域が、グローバルな視点の中で、自由な主体として独自の役割を果たし、全体のヴィジョンを実現していく世界が価値ある世界なのである。特に、文化や民族の多様性が増して世界が複雑化しつつも、それらが内的に統一されているような世界、すなわち内的に充実しているような強度ある世界こそが、より価値ある世界なのである。

したがってグローバル化という動向は価値の一元化や全体主義への傾斜であってはならず、国や地域の多様性を排斥するようなものに堕してはならないのである。それは、それぞれの国や地域、その文化や民族を尊重しながら、国家の壁を越えた全体のヴィジョンを実現していくようなものでなければならない。

その際、私たちは、自分たちが向かうべき価値ある世界を実現すべく、価値に対して繊細になっていなければならない。ホワイトヘッドは、文明化された人間社会の特質を「真」「美」「冒険」「芸術」「平安」によって特徴付けている。ここでは「真」「美」をとりあげてみよう。

彼によれば、「真理とは、現象の实在への順応である。」³人間は、科学的研究などを通じて真なる知識を獲得してきた。それによって、核の力、フロンガスの効用、食糧の生産性の上げ方、感染症への対処法を知ってきた。これらの真なる知識は価値あるものであり、科学技術の発達は人間の英知の賜物であろう。しかし、真なる知識 手段としての知や技術 だけでは十分ではない。フロンガスはオゾン層を破壊した。食糧が増えても貧富の格差が広がり、豊かな者は食べ物を捨て、貧しい者は依然として飢餓に苦しんでいる。ここで「美」という価値の重要性が際立ってくる。「美とは、経験の契機における様々な要因の相互的適応である。」⁴例えば、自然を技術によって支配するのではなく、地球上の生態系や動植物の多様性と個性を認め、調和を実現していこうとするとき、美的なのである。別の例で言えば、勝者と敗者をうみだしたり、貧富の格差を広げたりするのではなく、飢餓に苦しむ者などの固有の価値を認め、彼らを救うために食糧の生産性を向上させていくとき、「美」という価値が実現される。「美」は目的を含意する。そして「真」とともに調和が成立しているような「美」が「真的美」といわれ、世界、あるいはそこに住まう私たちが「真的美」という価値を成功裡に実現していくことこそ、換言すれば、真なる知識をもって調和のとれた世界を実現していくことこそ、人間や生命、地球、そして全宇宙にとって、より価値あることなのである。

グローバル・イシューへの対処やグローバル・スタディーズの根底にはこのような「真

³ AI, p. 241

⁴ AI, p. 252

的美」の価値が脈打っていなければならない。私たちはグローバリゼーションという動向の中で、価値への関与を無視したり、真なる知識のみを追い求めたりするのではなく、真的美という価値を実現していかなければならない。「英知」とは単なる知識の寄せ集めではない。価値への繊細さをなくしてしまうならば、私たちは闇の中をさまよい歩くことになるだろう。真的美という価値に対する繊細さをもって、世界に存在する諸国家や諸地域、諸民族等々の多様性と個性を認め、地球規模のヴィジョンを地域に根ざして実現していくとき、私たちは価値ある世界を実現しているのである。

4．おわりに：よりよい世界へ向かう冒険

本稿では、有機体の哲学を手がかりに、価値という観点からグローバリゼーションをみてきた。グローバル化という動向そのものだけでなく、グローバル・イシューへの対処やグローバル・スタディーズも、無条件に価値あるものではない。事実の分析や単なる知識の蓄積、行き当たりばったりの問題の解決だけでは十分ではないのである。研究の根底には必ず、よりよい世界を実現しようとする価値への関与が律動的に脈打っていなければならない。グローバル化の過程において私たちは、真的美という価値への繊細さをもって、国や地域、文化、民族等の多様性を認めつつ、国家の壁を越えた地球規模的な全体のヴィジョンを、地域に根ざして具現していくことが求められている。

しかし、価値ある世界とはいかなる世界か、よりよい世界をいかに実現していくべきか、という問いは簡単に答えられるものではない。とりわけ昏迷の中にある現代においては価値あるものが何であるか非常に見えにくくなっている。本論考がこれらの問いに確固たる答えを与えたわけではないと、私自身、十分承知している。前章の考察がホワイトヘッド研究として誤りを含んでいるかもしれないばかりか、他の分野の専門家からの批判もあるだろう。だが、本論考がその一考察となり、歴史の過程の一時代に執拗になってきたグローバリゼーションの中で、私たちが漠然と理解している「価値ある世界」「よりよい世界」を改めて問いなおすことを促せたとすれば、それだけで本稿の目的は達せられたことになる。

容易には答えられないが、しかし無関心ではいられない「価値ある世界とはいかなる世界か」「よりよい世界をいかに実現していくべきか」という問いを、私自身も、グローバリゼーションに関わる研究者も、その他の研究者も、絶えず問い続けていかなければならない。ホワイトヘッドは秩序を反復するだけの停滞した世界を批判し、「冒険がなければ、文明は完全に崩壊する」⁵と警告する。文明社会が善であるためには、過去に実現された安逸を越えて、新しい調和を実現すべく冒険していくべきなのである。グローバル化する世界において私たちは、課せられた課題を引き受け、問い、答え、批判し、そしてまた問うという仕方で冒険していくべきなのではないか。よりよい世界へ向かうグローバリゼーシ

⁵ AI, p. 279

ンのヴィジョンは、各階層の個、すなわち国家や地域、そして個々人において実現される。国家や地域のみならず、私たち一人一人が、グローバリゼーションの過程の中、よりよい価値を実現すべく生きるべきであろう。

参考文献

ホワイトヘッドのテキストの略号は以下の通り。

RM: *Religion in the Making*. 1926. New York: Fordham University Press, 1996.

AI: *Adventures of Ideas*. 1933. New York: Free Press, 1967.